

## 完了時称の機能<sup>1</sup>

### 完了形

完了形はいわゆる能動完了過去分詞第二形 *participium praeteritum activi secundum* と言われる、-АЪ- によって構成されるものに、連辞の現在形を付加して作られる。

その機能は当初アオリストとも、また未完了過去とも異なっていたといわれる。即ちそれは、過去において生じた何らかの事実の叙述だけではなく、結果が発話の時点において継続している過去の行為を表わすというのである<sup>2</sup>。

このために例えばボルコフスキー等はこれら完了形を厳密に言えば過去時称ではなく、過去に行なわれた行為の結果である、現在時に属する状態を表わすのであって、その意義はむしろ現在時称に近い、という<sup>3</sup>。

チェルニフは1130年頃に成立したムスチスラフ・ヴラヂミロヴィチの文書の冒頭の句 **СЕ ЯЗЪ ... ПОВЕЛѢЛЪ ЕСМЪ** を引用して、これが **ВОТ Я...ЕСТЬ ПОВЕЛЕВШИЙ** 「この我は.....命じた者である」にあたりとし、類例としてイーゴリ公軍記の次のような箇所を挙げている<sup>4</sup>。

О МОН СЫНОВУЮ, НГОРЮ Н ВСЕВОЛОДЕ, РАНО ЕСТА НАУДАА ПОЛОВЕЦКЮ ЗЕМЛЮ МЕУН ЦВЕЛНТИ, А СЕБѢ СЛАВЫ НСКАТИ.

おおわが甥たち、イーゴリよフセヴォロドよ、汝ら二人は早く剣によってポロヴェツの国を脅かし、己らに榮譽を求めはじめたことよ。

О ДНЕПРЕ СЛОВѢТНЦЮ, ТЫ ПРОБНЛЪ ЕСИ КАМЕННЫМ ГОРЫ СКВОЗѢ ЗЕМЛЮ ПОЛОВЕЦКЮ ТЫ ДЕЛѢЛЪ ЕСИ НА СЕБѢ СВЯТОСЛАВН НОСАДЫ ДО ПЛѢКЪ КОБЯКОВА: ВЪЗЛЕЛЪН, ГОСПОДННЕ, МОЮ ЛАДЪ КЪ МНѢ ...

おおドゥネープル・スローティチよ、汝はポロヴェツの国を貫き、石の山々をうがっている。汝はスヴァトスラヴの舟をゆらゆらと、コビャックの軍のもとに運んだではないか。わが夫をわれに運び返せ.....

<sup>1</sup> 『古代ロシア研究』 第18号 1991年 75-102頁。

<sup>2</sup> П. Я. Черных, *Историческая грамматика русского языка*, М. 1954, p. 242.

<sup>3</sup> В. И. Борковский, П. С. Кузнецов, *Историческая грамматика русского языка*, М. 1963, p. 260.

<sup>4</sup> П. Я. Черных, *op. cit.*, p. 242.

第一の例はキエフ大公スヴャトスラフが敗戦の知らせを受けて嘆く場面であり、第二の例は捕われたイーゴリ公の夫人ヤロスラヴナの嘆きの場面である。これらは何れも結果が現在に残っている過去の行為と考えることができるが、同時に主語によって示される対象の持つ属性の表現と解することもできる。すなわち例えば第二の例で言えば、ドゥネブルにたいして「おまえは岩山をうがち、夫の軍船を敵の国まで運ぶ能力を持っているのだから、夫を自分の許に運んでくれ」というほどの意味であると考えられる。第一の例も、イーゴリとフセヴォロドが余りに逸りすぎたことを嘆くものである。

このような主語によって示される属性の表現という側面をチェルニフは「一定の行為を行なった人物の指示という契機」という言葉で表わし、この契機は「述語として完了が用いられた場合には他の場合よりも遥かに大きな役割を果たし、またこの役割は助動詞が省略されはじめると更に大きなものとなった」と指摘している<sup>5</sup>。

しかし完了の初原的な意義は、はやくに失われ始め、これと意義的に近いアオリスト及び、まだ保存されている場合には、未完了過去の代わりに用いられ始めたが、このような完了形の機能の拡大と完了形によるアオリスト並びに未完了過去の駆逐に大いに力があったのは、完了形が完了体動詞からもまた不完了体動詞からも同じように作られたためであるとされる<sup>6</sup>。

もし完了形が文字通り完了のAspectを持つものであったとするならば、これがいわゆる不完了体動詞からも、また完了体動詞からも同じように作られるというのは、理解しにくい事と言わねばならない。なぜならアオリストは完了体的な動詞から、未完了過去は不完了体的な動詞から作られる傾向が時代を降るにつれて漸次鮮明になり、それと共に動詞の体への帰属が明確になって行くから、完了形がアオリスト及び未完了過去に代わって過去一般を表わす形式になるときは、すでに動詞の体の区別は十分に明確になっていた筈だからである。まさにこの時期に完了のAspectをもつ形式が不完了体動詞からも作られるというのは、いかにも不自然である。

この矛盾を回避するためには、少なくともいわゆる完了形の機能がAspectから中立であることを要すると思われる。もしそうとすれば、完了形の機能がどのようなものであったのかを、アオリストや未完了過去をもつ中世ロシア語の動詞組織がまだ崩壊していない段階において考察することが、ぜひとも必要となる。

書かれた文書の場合、そこに用いられる言語は、どうしても話し言葉よりも古い段階を反映するのが普通であり、この意味でここに用いられているアオリストや未完了過去の形は、既に口語では廃用に帰っていて、話し言葉では完了形が用いられていた可能性もある。もしそうであるならば、完了形は機能においても、アオリストや未完了過去と同じでなければならないであろう。しかしもし完了形がアオリストあるいは未完了過去の形と異なる

<sup>5</sup> *ibid.*

<sup>6</sup> П. Я. Черных, *op. cit.*, p. 243.

機能において用いられていたならば、後者の形は口語においてもいまだ使用されていた可能性が高い。ノヴゴロド第一年代記宗務院本は、その最後の部分においては、完了形がアオリストと同じく単純な過去時の表現に用いられているが、その他の部分は独自の機能を持っていると思われるから、この写本について完了形の機能を考察することは、重要な意味を持つと考えられる。すなわちもし完了形が独自の形を持っていたと結論されるならば、ここで用いられているおびたしい数のアオリストおよび未完了過去は、いまだ生きているカテゴリーであったということができると同時に、これらの形が未だ生きていた最後の段階における完了形の機能を明らかにし、これがやがて過去を表わすただ一つの形として発展する筋道を明らかにすることができるかと期待されるからである。

### 会話部分における完了形

完了形は会話の部分にきわめて多く認められる。クドリャフスキーは原初年代記ラウレンチー写本についてこのことを指摘し、これを会話には生きた口語が反映するためであるとしているという<sup>7</sup>。これに対しイストリナは会話の文が地の文と機能的に異なっており、その機能の異なりが、ここに完了形が用いられることを容易にしていると主張する。すなわち「直接話法においては、物語にみられるような述べられている過去の事件にたいする話者の客観的な態度は存在しない。逆にそこでは話者にとって現在である、主観的な感情が強く現われる。直接話法のこれらの特徴によって、そこに過去の複合形が述語として用いられることが説明できるのである。」<sup>8</sup> 換言すればイストリナは「語り」と「伝達」という二つの異なる機能を持ったテキストを考え、伝達のテキストの機能が完了形の使用を容易にすると考えるのである。

イストリナはこのような完了形の機能として、次のように述べる。

「このような文(すなわち伝達のテキスト中であって完了形を述語として持つ文)の述語の内的な意義を考察すれば、明らかにそれは対象の活動の時間における発展を意味するのではなく、行為の過程そのものを意味するのではなくて、対象(人物)に一定の振舞いを帰属させるのである。」<sup>9</sup>

これは基本的には既に述べたチェルヌيوفの「一定の行為を行なった人物の指示」と同じ事を意味している。例えば、

КЛАДЮСА СЪТЪН СОФНН И ГРОБОУ ОЦА МОЮГО· И ВСЪМЪ НОВ-  
ГОРОДЦЕМЪ· ПРНШЪЛЪ ЮСМЪ КЪ ВАМЪ· СЛЫШАВЪ НАСНАЛЪЕ Ѡ  
КНАЗЪ· И ЖАЛЪ МН СВОЮЮ ОЦННЫ· (р. 51, 76R, 6718(1210))

<sup>7</sup> Д. Н. Кудрявский, К статистике глагольных форм в Лаврентьевской летописи, *Изв. Отд. р. яз. и сл.*, 1909, т.14, кн.2.

<sup>8</sup> К. С. Истрина, Синтаксические явления синодального списка 1 Новгородской летописи, *Изв. Отд. р. яз. и сл.*, 1919, т.24, кн.2, р. 114.

<sup>9</sup> *op. cit.*, р. 114.

私は聖ソフィア教会、および私の父の棺およびすべてのノヴゴロドの人々にあいさつを送ります。私はあなたがたのところに来たのは、公たちによる迫害のことを聞いて、私は自分の世襲領地を哀れに思ったからです<sup>10</sup>。

МНРА НЕ ХОУЕМЪ А МОУЖН ОУ МЕНЕ· А ДАЛЕУЕ ЮСТЕ ШАН· Н ВЫШАН  
ЮСТЕ АКЫ РЫБЫ НА СОУХО· (p. 56, 85R, 6724(1216))

私たちは和を望まない。私たちのところには勇士がいるが、あなたがたは遠くまで来すぎて、陸に上がった魚のようにになっている(魚のように出てしまっている)。

КНА· ОЖЕ НЪТОУ ВНЫ ЮГО· ТЫ К НАМЪ КРСТЪ ЦѢЛОВАЛЪ БЕЗ  
ВНЫ МОУ НЕ АНШТН· А ТОБЕ СМ КЛАНАЕМЪ· А СЕ НАШЬ ПОСАДНН·  
А В ТО СМ НЕ ВДАДНМЪ· (p. 59, 91R-V, 6724(1218))

公よ、彼に罪がないなら、あなたは罪なくして人を罷免しないと十字架に口づけして私たちに誓ったではありませんか。私たちはあなたにお願いします。これは私たちの市長官であり、そのことについては譲りません。

イストリナはもし最初の例の ПРНШЬЛЪ ЮСМЪ をアオリスト ПРНДОУХЪ にすれば、「行為の過程そのものを示すことになる」が、完了形の場合には「行為をその結果において主語に帰属させる」という<sup>11</sup>。

これは三人称の場合にも同様である。例えば、

А ННФОНТЬ ТАКО МЪВЛАШЕ· «НЕ ДОСТОННЪ ЮСТЕ СТАЛЪ· ОЖЕ  
НЕ БЛАГОСНЪ ЮСТЕ Ѡ ВЕЛНКАГО СВОРД· НН СТАВЛЕНЬ·  
(p. 28, 26R, 6657(1149))

だがニフオンは「(府主教は)大本山によって祝福を与えられていないし、任命もされてもないのだから、彼はふさわしくない者になってしまっている」と言っていた。

Н НЕ НМН· КНАЖЕ· ВЪРЫ БРАТЪЫ НАЮ· СОУ НА ТА СЪВЕТАН СЪ  
УЪРННГОВЬСКИМН КНАЗН· (p. 50, 73V, 6717(1209))

<sup>10</sup>以下底本としては、*Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов*、Под редакцией и с предисловием А. Н. Насонова, М.-Л. 1950. を用いた。ウィーン字体は神戸市外国語大学の岡本崇男氏が作成されたものを使用させていただいた。この字体によって表記するために、底本では区別されていない文字を、*Харатейная летопись* によって区別した。なお、分かち書き、引用符などは底本によっている。

<sup>11</sup>К. С. Истрина, *op. cit.*, p. 115.

公よ、私たち二人の兄弟を信じてはなりません。彼らはチェニゴフの公たちと共にあなたに対して陰謀を企んでいます。

НОВГОРОДЦН ТЕБЕ НЕ СЛОУШАЮТЬ· МЫ ДАНИ ПРОШДАН ТОВѢ· І  
ОНН НА ВЫГНАЛИ· А ІНѢХЪ НЗБНАН· А ДОМЫ НАША РОЗГРДВНАН·  
А ЯРОСЛАВА БЕЩЬСТВОВАЛИ· (p. 89, 149R, 6778(1270))

ノヴゴロドの人々はあなたの言うことを聞かない。私たちあなたに貢ぎものを乞うたが、彼らは私たちを追い出し、あるものを殺し、私たちの家を略奪し、ヤロスラフを辱めた。

これと同時にイストリナは上述した「一定の行為を行なった人物の指示」とは考えられない例の存在することを認め、これらが「対象が如何なるものであるかではなく、過去の単純形 (i.e. アオリストなど) と同じく対象が何を為したかを示す」<sup>12</sup>という。例えば、

ЯКО· БРАТНІЕ СТРАДАЛИ· ДѢДИ НАШН Н ОУН· ЗА РОУСЬСКОЮ ЗЕМ-  
ЛЮ· ТАКО БРАТІЕ Н МЫ· ПОНДНМЪ ПО СВОЕМЪ КНАЗН·  
(p. 53, 79V, 6722(1214))

兄弟たちよ、私たちの祖父や父がルシの国のために尽くしたように、兄弟たちよ、私たちも私たちの公の後に従おう。

КЪНАЖЕ НЕ ХОУЕМЪ НЗМЕРЕТН НА КОННХЪ· НЪ ЯКО ОУН НАШН  
БНАЛСА НА КОУЛАУЬСКѢН· ПѢШН· (p. 56, 85V, 6724(1216))

公よ、私たちは馬上で死にたくありません。それよりは私たちの父たちがコロクシャ川で徒歩で戦ったように、(私たちも戦いたい)。

この二つの用法を説明するために、イストリナは完了形の機能を次のようなものと考えた。即ち、

「この形式の意義はもっと広いものであった。-ЛЪ に終わる形動詞は主語自身によって行なわれた主語の性質のみならず、その状態あるいは行為をも示した。但し状態及び行為は、時間におけるその発展の描写を考慮せず、行為の過程自身を考慮しないで指示される、という特徴を持っていた。」<sup>13</sup>

イストリナによれば、この基本的な意義からこの形は「対象自身によって行なわれた行為の結果を、既に存在する、所与のものとして示した。ここから一方では性質の意義が強化され、また他方では過去の行為の時点の意義が弱められ、特徴を対象に帰属させる行為が帰せられるところの、現在時の意義が前面に出ることが可能になったのである。」<sup>14</sup>

<sup>12</sup> *op. cit.*, p. 116.

<sup>13</sup> *ibid.*

<sup>14</sup> К. С. Истрина, *op. cit.*, p. 117.

もしイストリナにしたがって完了形の意義を時間におけるその発展の描写を考慮しない状態及び行為、過程自身を考慮しない行為を表わすところにあるとすれば、それと対極にあるアオリストは発展する状態及び行為、過程自身を考慮する行為を表わすことになるであろう。しかしこれは常識的にはむしろ未完了過去形の機能に属するはずである。

このような疑問を持ってイストリナの所説を検討すれば、著者の考えているものは実は若干これとは異なるものであることが次のような例に対する著者の説明から判明する。

И РЕКОША ПЛЪСКОВНИЦИ ПРИСЛАВЪШЕ· ГРЪУННА· «ТОБЕ СМ КНАЖЕ  
 КЛАНАЕМЪ· И БРАЪН НОВГОРОДЪЦЕМЪ· НА ПОУТЬ НЕ ИДЕМЪ А  
 БРАЪН СВОЕН НЕ ВЫДАЕМЪ· А С РИЖАНЫ ЮСМЕ МНРЪ ВЪЗЛАН·  
 КЪ КОЛЫВАНЮ ЮСТЕ ХОДНВЪШЕ СЕРЕБРО ПОНМАЛН· А САМИ ПОН-  
 ДОСТЕ В НОВЪГОРОДЪ· А ПРАВДЫ НЕ СТВОРИ· ГОРОДА НЕ ВЪЗМСТЕ·  
 А ОУ КЪСН ТАКО· А ОУ МЕДВЪЖЕ ГОЛОВЪ· ТАКОЕ· А ЗА ТО НАШЮ  
 БРАЪНЮ ИЗЪБША НА ОЗЪРЪ· А НИИ ПОВЪДЕНН· А ВЫ РОЗДРАВШЕ  
 ТА ПРОУЪ· НИИ ЮС НА НА ОУДОУМАЛН· ТЪ МЫ ПРОТНВОУ ВАСЪ СЪ  
 СТОЮ БЦЕЮ И СЪ ПОКЛОНОМ ...» (p. 66, 105R, 6736(1228))

そこでプスコフの人々はグレチンを使者として送って来て「公よ、私たちはあなたと兄弟であるヴゴロドの人々にあいさつを送ります。私たちは出陣はしないし、自分たちの兄弟も引き渡しません。私たちはリガの人々と和を結んでいるからです。あなたがたはコルイヴァニに来て銀を略奪しました。自分はノヴゴロドに出発し、約束を果たさず、町を占領しませんでした。ケシでもメドヴェジャ・ゴロヴァでもそうでした。そのかわりに私たちはは兄弟(のある者)を湖で殺され、他の者を連れて行かれました。あなたがたは(私たちを)苦しめて見捨てました。もしあなたがたが私たちになにか企んでいるなら、私たちは聖母と共につつしんであなたがたに異議をとなえます……」と言った。

「この例は疑いなく生きた会話の例である。その始めには -ЛЪ に終わる通常の述語があり、その後にアオリストの形が続く。しかし終わりにはまた -ЛЪ に終わる形動詞が現われる。そしてアオリストの用いられているプスコフの人々の言葉の部分において、言葉の性格が少し変化する。すなわち会話が物語に移行し、そこで一連の事件が描かれる。その後物語は中断されて、再び言葉の会話的な性格と共に、-ЛЪ に終わる述語の形が現われる。この例にみられるアオリストと -ЛЪ に終わる形動詞の形の交替は、偶然的なものではなく、言葉の内的意義を反映していると思われる」<sup>15</sup>。

<sup>15</sup> *op. cit.*, p. 118.

以上の説明から明らかになるのは、イストリナが考えているのは「会話」の部分、すなわち伝達のテキストにおいて完了形が現われ、語りのテキストの部分にアオリストが現われる、ということに過ぎない。従って完了形に対置される、「発展する行為及び状態」、「過程を考慮する行為」というのは、実は述語が表わす行為に内在するものではなくて、話が前に進むことにほかならない。そうとすればこれは完了形あるいはアオリストの機能ではなくて、テキストの性質に過ぎないということになる。そうすればこれらの述語に内在する機能としては、アオリストが話を前に進める機能、換言すれば行為の継起性を保証する機能をもつとすることを意味するであろう。もし完了形がこれと対極にある機能を持つとすれば、それは行為の継起性を保証しないことにならざるを得ないであろう。イストリナの所説は、疑いもなく真理を含んでいると思われるが、述語の機能をテキストの性質に還元してしまっているという点で正しいものと言うことはできない。

それでは完了形そのものに内在する機能とはなにか、がここでは問題となる。この問いに答えるために、先ず、直接話法の中にみられる完了形について考察をすすめることにしたい。

完了形が直接話法の中に頻繁に現われることについては、既に諸家の認める通りであるが、その使用についてみれば人称によって微妙な相違があるように思われる。

その中でも二人称は、比較的明瞭な使用の仕方を示しているように思われる。

その第一は相手に対して相手の行なった行為を明確に示して、いわば念を押す場合である。これは相手がある行為を行なったという話者の確信を示すと同時に、相手に対してそれを認めさせようとする話者の主張と見ることも出来る。

ВЪ ЛЕТО 6644· ННДНКА <sup>↑</sup>ЛД· ДГ· НОВГОРОЦН ПРНЗВАША ПЛЬСКОВН-  
 УЕ Н ЛАДОЖАНЫ Н СДОУМАША· ЮКО НЗГОННТИ КНЗА СВОЕГО ВСѢ-  
 ВОЛОДА· Н ВЪСАДНША ВЪ <sup>↑</sup>ЕПЛЬ ДВОРЪ· СЪ ЖЕНОЮ Н СЪ ДѢТЬМН Н  
 СЪ ТЫЩЕЮ· МЦА МАНН ВЪ· КН... А СЕ ВНЫ ЮГО ТВОРАХОУ· Д· НЕ  
 БЛЮДЕТЬ СМЕРДЪ· В· «УЕМОУ ХОТѢЛЬ ЮСН СЕСТН ПЕРЕАСЛАВАН»  
 ·Г-Е· «ЕХАЛЪ ЮСН СЪ ПЪЛКЪ ПЕРЕДН ВСѢХЪ· А НА ТО МНОГО· НА  
 ПОУАТЫН ВЕЛЕВЪ НЫ· РЕУЕ· КЪ ВСѢВОЛОДОУ ПРНСТОУПНТИ· А ПАКЫ  
 ОСТЪПНТИ ВЕЛѢТЬ» (р. 24, 16V-17R, 6644(1136))

6644年。インディクトの十四年、ノヴゴロドの人々はプスコフの人々およびラドガの人々を呼び寄せ、自分たちの公フセヴォロドを追い出そうと相談した。五月二十八日に……彼らが彼の罪としたのは次のことである。1. 彼がスメルドを大切にしない、2. 「あなたがペレヤスラヴリに座そうとしたからです」、3. 「あなたは皆に先だって戦場から馬で去り、しかもそれは何度もあ

りました。最初に私たちにフセヴォロドに向かうように命じていながらまた退くように命じました。」

ここではノヴゴロドの人々が衛星都市のプスコフ及びラドガの人々と共に、恐らくは民会を開いてノヴゴロド公フセヴォロドの罪を弾劾し、彼を幽閉したのである。この直接話法は民会で発せられた言葉であると考えられる。

次の例も同様である。

ТО́ ЖЕ ЛѢ́ БЫ́ МАТЕЖЬ В НОВѢГОРОДѢ́· НАУДАША ИЗГОННТИ КНѢ́ЗА  
 ЯРОСЛА́ ИЗ ГОРОДА· І СЪЗВОННША ВѢ́УЕ НА ЯРОСЛАВЛН ДВОРѢ́· І  
 ОУВНША ІВАНКА ... А КЪ КНѢ́ЗЮ ПОСЛАША НА ГОРОДНЩЕ́· І СПНСАВШЕ  
 НА ГРАМОТОУ ВСЮ ВННОУ ЕГО· «УЕМОУ ЕСН ѠЩАЛЬ ВОЛУХОВѢ́ ГОГОЛ-  
 НЫМН ЛОВЦН· А ПОЛЕ ѠЩАЛЬ ЕСН ЗАМУНМН ЛОВЦІ УЕМОУ ВЗАЛЬ ЕСН  
 ОЛЕ́ЖННѢ́ ДВОРѢ́ МО́РТКННННУА· УЕМОУ ПОНМАЛЬ ЕСН СЕРЕБРО НА  
 МНКНФОРѢ́ МАНѢ́СКНННУН І НА РОМАНѢ́ БОЛДЫЖЕВНУН· І НА ВАР-  
 ФЛОМѢ́Н· А ІНОЕ· УЕМОУ ВЫВОДНШЬ Ѡ́ НА ІНОЗЕМЦА· КОТОРНН ОУ  
 НАСЪ ЖНВОУТЬ» (p. 88, 148R-V, 6778(1270))

この年ノヴゴロドで騒乱が起った。人々がヤロスラフ公を町から追い出そうとし、ヤロスラフの屋敷に民会を召集し、イヴァンコを殺したのである……そして人々は文書にヤロスラフのすべての罪を書き上げて、ゴロヂシチェの彼のもとに使者を送った。「あなたが鴨の狩人たちを使ってヴォルホフ川を奪い、兎の狩人を使って野原を奪ったからです。貴方がモルトカの子オレクサの屋敷を取ったからです。あなたがマヌスカの子ミキフォル、ボルドウイジの子ロマン、およびヴァルフオロメイから銀を奪ったからです。さらにあなたが私たちの許から私たちの所に住んでいる異邦人を連れ去ったからです。」

次の例も文脈から明らかなように、公の行為を弾劾するものと考えられる。

... ЯРОСЛАВЪ ПОИДЕ ОБ ОНОУ СТОРОНОУ К РОУСѢ́· І СѢ́ДЕ В РОУСѢ́·  
 А В НОВѢГОРОДѢ́ ПРНСЛА ТВОРНМІРА· «ВСЕГО УТО ВАШЕГО НЕЛЮ-  
 БНЮ ДО МЕНЕ· ТО́ ЛНШАЮСА· А КНѢ́ЗН ВСН ЗА МЕНЕ ПОРОУУАТСА»·  
 НОВГОРОДНЦН ЖЕ ПОСЛАША К НЕМОУ ЛАЗОРА МОІСНЕВНУА· «КНѢ́ЖЕ·  
СДОУМАЛЬ ЕСН НА СТОЮЮ СОФЬЮ· ПОБѢ́ДН АТЬ ІЗЪМРЕМЪ́ УТНО ЗА  
СТОЮЮ СОФЬЮ· ОУ́ НА КНѢ́ЗА НѢ́ТОУТЬ· НО БГѢ́ І ПРАВДА Н СТАЮ  
 СОФЬЮ· А ТЕБЕ НЕ ХОУЕМЪ́» (p. 89, 149V, 6775(1270))



ヤロスラフは川向こうのルサに行き、ルサにとどまった。そしてノヴゴロドにトヴォリミルを送って(言った)。「あなたがたが私について好ましく思わないことのすべてを私は止める。すべての公たちが私について保証するであろう」と。ノヴゴロドの人々はモイシイの子ラゾリを彼の許に送った。「公よ、あなたは聖ソフィアに対して陰謀を企てました。来なさい、私たちは聖ソフィアのために名誉を持って死にましょう。私たちには公はなく、神と正義と聖ソフィアがあります。我々はあなたを望みません。」

ここで聖ソフィアはノヴゴロドの守り神であり、ノヴゴロドのシンボルである。聖ソフィアに一旦背いた者をノヴゴロドの人々は公として戴くことはできなかった。

このようにしてみれば、次の例も同じく相手の罪を鳴らすものと考えられる。

ПОСАДНИИ ЖЕ ОПА ВЪЗЪВАРИ ГОРОДЪ ВЪСЬ· И СМЕНЪ БОРНСОВНИЦЬ  
НА НВАНКА И НА ЮКНМА ВЛОУНКОВНИЦА· И НА ПРОКШЮ ЛАШНЕВА  
ПОНДОША СЪ ВЪУА И МНО ДВОРОВЪ РОЗГРАВНИША· А ВОЛОСА  
БЛОУТКНИННИЦА НА ВЪУН ОУБНИША· РЕ ПОСАДНИИ· «ТЫ ЮСН МОН  
ДВОРЬ ХОТЕЛЬ ЗАЖЕУН·» А ПРОКШНИИ ДВОРЬ ЗАЖГОША·

(p. 69, 110V, 6738(1230))

市長官とボリスの子スメンは、イヴァンコ、ヴルンコの子ヤキム、およびプロクシャ・ラシネフに対して再び町全体を蜂起させた。彼らは民会から繰り出して多くの邸を略奪し、ブルトカの子ヴォロスを民会で……殺した。市長官が「お前は私の邸に火を放とうとした」と言ったので(人々は)プロクシャの邸に火を放った。

連辞の代わりに人称代名詞 ТЫ を用いた場合も同様である。

КНЗЬ ЖЕ СТОСЛА ПРНСЛА СВОИ ТЫСАЦЬСКИИ НА ВЪУЕ· РЕ «НЕ  
МОГОУ БИТИ С ТВЪРДСЛАВОМЪ· И ШИМАЮ Ш НЕГО ПОСАДНИИЦЬ-  
СТВО· РЕКОША ЖЕ НОВОГОРОДЦИ· «Ю ЛИ ВНИА ЮГО·» ОНЪ ЖЕ  
РЕ· «БЕЗЪ ВНИИ·» РЕ ТВЪРДСЛА· «ТОМОУ ЮСМЪ РАДЪ ОЖЕ ВНИИ  
МОЮИ НЪТОУ· А ВЫ· БРАДЬЕ· ВЪ ПОСАДНИИУСТВО· И ВЪ КНЗЬХЪ·  
НОВОГОРОДЦИ ЖЕ ШВЪЩАША «КНА ОЖЕ НЪТОУ ВНИИ ЮГО· ТЫ К  
НАМЪ КРТЬ ЦЪЛОВАЛЪ БЕЗЪ ВНИИ МОУ НЕ ЛИШНТИ· А ТОБЕ СА  
КЛАДНАЕМЪ· А СЕ НАШЬ ПОСАДНИИ· А В ТО СА НЕ ВДАДНИИ·»

(p. 59, 91R-V, 6726(1218))

スヴァトスラフ公は自分の千人長を民会に送り、「私はトヴェルヂスラフと共にあることは出来ないのです、彼から市長官職を取り上げる」と言った。ノヴゴロドの人々は「彼に罪があるのでしょうか」と言った。「罪はない」と彼は言った。トヴェルヂスラフは「私に罪がないと聞いて私は嬉しい。ところで兄弟たちよ、市長官職と公位についてはあなたがたに(決める)権利がある」と言った。ノヴゴロドの人々は「公よ、彼に罪がないなら、あなたは罪なくして人を罷免しないと十字架に口づけして私たちに誓ったではありませんか。私たちはあなたにお願いします。これは私たちの市長官であり、そのことについては譲りません」と答え、和解した。

このような使用を背景にしてみれば、次のような場合も単に過去に行なわれた結果が現在に及んでいるというのではなく、話者の事実の確認乃至行為が行なわれたとする主張(.....したではないか)と考えることができよう。

МЪСТНСЛАВЪ ЖЕ И КОСТАНТИНЪ· И ДВА ВОЛОДИМІРА· СЪ НОВГОРОДЦИ СТАША НА РЪЦѢ ЛНПНУН· И ОУЗРѢША ПЪЛКЫ СТОЮЩА· И ПОСЛАША ЛАРНОНА СОУЬСКАГО· КЪ ГЮРГЮ «КЛАНАЕМЪ ТИ СМ· НѢТОУ НЫ СЪ ТОВОЮ ОБНДЫ· СЪ ЯРОСЛАВОМЪ НЫ ОБНДА· ПОУМОУ<sup>π</sup> МОН НОВГОРОДЦИ И НОВОТЪРЖЬЦИ· И УТО ЮСИ ЗАШЬЛЪ ВОЛОСТИ НАШЕН НОВГОРОДСКОИ· ВОЛОКЪ ВЪСПАТИ· МИРЪ С НАМН ВЪЗЪМН· А КРТЬ КЪ НАМЪ ЦѢЛОУН· А КРЪВН НЕ ПРОЛВАНМЕ·»

(p. 56, 85R, 6724(1216))

一方ムスチスラフ、コンスタンチン、および二人のヴラヂミルはノヴゴロドの人々と共にリピツァ河畔に陣を布いた。彼らは集まった軍隊を見て、百人長のラリオンをユリーのもとに使者として送り、「あなたにあいさつを送ります。私はあなたに対して含むところはありません。ただヤロスラフに対してのみ敵意を持つのです。私の家臣とノヴゴロドとノヴィ・トルグの人々を自由にし、あなたがかつて手にいれた私たちのノヴゴロドの領地のヴォロクを返して下さい。私たちと和を結んで私たちの十字架に口づけして下さい。血を流さないようにしようではありませんか」と(言った)。

И ПОСЛА [МНХАНЛЪ] КЪ ЯРОСЛАВОУ НЕЗДНЛОУ ПРОКШНИЦА· НВАНКА ТЪДОРКОВИЦА· РЕКА· «ШТОУПИСА ВОЛОКА· И УТО ЮСТЬ НОВГОРОДСКАГО ЗА ТОВОЮ СЛЮЮ ЮСИ ЗАШЬЛЪ· А КРТЬ ЦѢЛОУН·» И РЕ ЯРОСЛА· «ТО НЕ ШТОУПАЮ А КРЬ НЕ ЦѢЛОУЮ· ВЫ СОБЕ А Я

СОБЕ·» (p. 68, 109V, 6737(1229))

そして(ミハイルは)ヤロスラフのもとにプロクシャの子ネズジラ、トゥドルコの子イヴァンコを使者として送り、「ヴォロクとあなたがたが力づくで占領したあなたのノヴゴロドの地から手を引き、十字架に口づけしなさい」と言った。ヤロスラフは「それは手放さない。十字架に口づけもしない。あなたがたはあなたがた、私は私だ」と言った。

次の例もこれに属するものと考えられる。

ФРАЗН ЖЕ Н ВСН ВОЈВОДЫ НХЪ ВЪЗЛЮБИША ЗЛА Н СРЪБРО· НЖЕ  
МѢНАШЕТЬ НМЪ НСАКОВИЦЬ· А ЦРЬВА ВЕЛѢННЮ ЗАБЫША Н ПАПИНА·  
ПЪРВОЮ ПРИШЪДЪШЕ ВЪ СОУДЬ· ЗАМКЫ ЖЕЛѢЗНЫМЪ РАЗЪВША·  
Н ПРИСТОУПНВЪШЕ КЪ ГРАДОУ· ОГНЬ ВЪВЕРГОША· ДРЬ МѢСТЬ ВЪ  
ХРАМЫ· ТЪГДА ЦРЬ ОЛЬКСА ОУЗЪРЕВЪ ПЛАМЕНЬ· НЕ СТВОРН БРАНИ  
ПРОТНВОУ НМЪ· ПРИЗВАВЪ БРАТА НСАКА· ЮГО ЖЕ СЛѢПН· ПОСАДИ  
ЮГО НА ПРѢСТОЛѢ· Н РЕ· «ДАЖЕ ЮСН· БРА· ТАКО СТВОРНЛЪ·  
ПРОСТИ МЕНЕ· А СЕ ТВОЕ ЦРЬТВО·» (p. 46, 65V-66R, 6712(1204))

フリヤギとすべての司令官たちは、イサキオスの子が彼らに約束した金と銀を好み、皇帝の命令を忘れた。まず金角湾に到着して鉄の鎖をこわし、町に近付き、四カ所で教会に火を投げ込んだ。その時皇帝アレクシオス(三世)は炎を見て、彼(イサキオスの子)に対して戦わなかった。彼は(自分が)盲目にした兄イサキオスを呼び寄せ、彼を帝位につけ、「兄さん、あなたがこうしたので。私を許して下さい。これはあなたの帝位です」と言って……

ビザンツ皇帝アレクシオス二世を盲目にして帝位を篡奪した弟のイサキオス三世に対して、アレクシオスは復讐を誓い、息子を脱出させた。息子は第四回十字軍と共にコンスタンティノポリスに迫り、町に火を放った。これがこの箇所背景である。ДАЖЕ ЮСН ТАКО СТВОРНЛЪ というのは、イサキオス三世がアレクシオス二世に対してコンスタンティノポリスが焼け、略奪される事態に至らしめたのをアレクシオス二世のせいにするための科白である。

二人称複数の場合も基本的には単数の場合と何等異なるところはない。相手の非を鳴らして弾劾する文脈に用いられる例として、次のようなものがある。

ВЪ ТО ЖЕ ЛЕТО НЗГОНИ ВСЕВОЛОДЪ УЪРМЪНН· СНЬ СТОСЛА-  
ВЛЪ· ПРАВНЪКЪ ОЛГОВЪ· ВНОУКЫ РОСТНСЛАВЛЕ· НЗ РОУСН· ТА

РЕКА· «БРА МОЯ ЮСТЕ ·В· КНАЗА ПОВЕСНАН ВЪ ВЪ ГАЛЛИЦН· ЯКО  
ЗЛОДѢМ· Н ПОЛОЖНАН ЮСТЕ ОУКОРЪ НА ВСѢХЪ· Н НѢТОУ ВАМЪ  
УАСТИ ВЪ РОУСКОМЪ ЗЕМЛІ·» (р. 53, 78V, 6722(1214))

同じ年オレグの曾孫、スヴャトスラフの子、フセヴォロド・チェルムヌイは、ロススラフの孫たちをルシから追い出し、「お前たちはガリチで、私の兄弟である二人の公を罪人のように吊し首にし、すべての者を辱めた。お前たちの分け前はルシの国にはない」といった。

また次の例はアオリストとの対比と言う点で、きわめて興味深いものである。

ТЪГДА ЖЕ ОУВѢДОВЪШЕ ТАТАРН· ОЖЕ НДОУТЬ РОУСТНН КНЗН  
ПРОТНВОУ НМЪ· Н ПРНСЛАША ПОСЛЫ· КЪ РОУСКИМЪ КНЗЕМЪ· «СЕ  
СЛЫШНМЪ ОЖЕ НДЕТЕ ПРОТНВОУ НАСЪ· ПОСЛОУШАВШЕ ПОЛОВЬЦЪ·  
А МЫ ВАШЕН ЗЕМЛІ НЕ ЗАМХОМЪ· НН ГОРОДЪ ВАШНХЪ· НН СЕЛЪ  
ВАШНХЪ· НН НА ВАСЪ ПРНДОХОМЪ· НЪ ПРНДОХОМЪ БМЪ· ПОУЩЕНН  
НА ХОЛОПЫ Н НА КОНЮСН· СВОЖ НА ПОГАННА ПОЛОВУЕ· А ВЫ  
ВЪЗМІТЕ С НАМН МНРЪ· АЖЕ ВЫБЕЖАТЬ КЪ ВАМЪ· А БННТЕ НХЪ  
ШТОЛѢ· А ТОВАРЫ ЮМАНТЕ К СОБЕ· ЗАНЕЖЕ СЛЫШАХОМЪ· ЯКО Н  
ВАМЪ МНОГО ЗЛА СТВОРНША· ТОГО ЖЕ ДѢЛА Н МЫ БНЕМЪ·»  
ТО ЖЕ РОУСТНН КНЗН НЕ ПОСЛОУШАША· НЪ ПОСЛЫ НЗБНША· А СМН  
ПОНДОША ПРОТНВОУ НМЪ· Н НЕ ДОШЪДЪШЕ ОЛЬШЫМ· Н СТАША НА  
ДНѢПРѢ· Н ПРНСЛАША К НМЪ ВТОРОЖЕ ПОСЛЫ ТАТАРН· РЕКОУЩЕ  
ТАКО: «А ЮСТЕ ПОСЛОУШААН ПОЛОВЬУЪ· А ПОСЛЫ НАША ЮСТЕ  
НЗБНАН· А НДЕТЕ ПРОТНВОУ НА· ТЪ ВЫ ПОНДНТЕ· А МЫ ВАСЪ НЕ  
ЗАМАН· ДА ВСѢМЪ БЪ·» (р. 62, 97R-98R, 6732(1224))

この時タタールはルシの公たちが彼らに向かって攻めて来ることを知り、ルシの公たちのもとに使者を送って来た。「私たちは、あなたがたがポロフツィの言うことを聞き私たちにに向かって兵を進めていると聞いていますが、私たちはあなたがたの国も町も占領していません。私たちはあなたがたを攻めに来たのではなく、ホローブであり自分たちの馬丁である異教徒のポロフツィに対して神が差し向けられた者として来たのです。あなたがたは、私たちと和を結び、彼らがあなたがたのもとに逃れて来ても、そこから彼らをたたき出し、(彼らの)財物を自分のものにして下さい。なぜなら私たちは彼らがあなたがたに対して多くの悪を行なったと聞いているからです。私たちが戦っているのもそのためです」と。ルシの公たちはそれに耳をかさず、使者を殺し、自分たちは彼

らに向かって兵を進めた。彼らがオレシエまで行かず、ドネブルのほとりに陣を布いたときタタールは彼らのもとに二度目の使者を送ってきて、「あなたがたはポロフツィの言うことを聞き、私たちの使者を殺し、私たちに向かって兵を進めています、(それなら) 来なさい、だが私たちはあなたがた(の国)を占領したことはありません。神がすべてを知っておられます」と言った。

ここにおいてタタールの汗が送った第一の使者の口上には、過去時称としてすべてアオリストが用いられている。これらは三人称複数数の **СТВОРИША** を除いて何れも一人称複数であり、二人称複数ではないけれども、全体の調子は明らかに客観的な事実の叙述によって自己の立場をルシの公達に説明しようとするものである。

ところがルシの公たちが使者を誅殺して出陣すると、第二の使者の口上は一転して相手の非を鳴らす威嚇的なものとなり、過去形はすべて完了形にとって代えられる。ここには一人称複数も一例用いられているが、これも後に見るように「我々が攻めたのではない」という事実の確認の主張になっていると思われる。

このような使用を背景にしてみれば、イストリナが「行為をその結果において主語に帰属させる」例として挙げている二人称複数数の例も少し異なったように解釈できると思われる。再録すれば、

**ШВЕТАША ЖЕ· «МНРА НЕ ХОУЕМЬ· МОУЖИ ОУ МЕНЕ· А ДДЛЕУЕ  
ЮСТЕ ШАН· Н ВЫШАН ЮСТЕ АКЫ РЫБЫ НА СОУХО»**

(p. 56, 85R, 6724(1216))

彼らは「私たちは和を望まない。私たちのところには勇士がいるが、あなたがたは遠くまで来すぎて、陸に上がった魚のようにになっている(魚のように出てしまっている)」と答えた。

これはノヴゴロド軍を率いたムスチスラフとコンスタンチンがリピツァ川に布陣し、フザ川に布陣したヤロスラフとユリーに使者を送り、ヤロスラフに宿意はあるがユリーには敵意をもっていないことを伝え、捕えられているノヴゴロドの人々とノヴィ・トルグの人々を放し、ユリーが奪ったノヴゴロドの領地であるヴォロクを返して和を結ぼう、と提案したのに対する答えである。したがってこれは単に「お前たちは遠くまで来てしまって居り、陸に上がった魚のようにになってしまっている状態にある」という単なる「完了」の意味というよりは、相手に自分たちの状態を確認させる威嚇の言葉であるとみるべきであろう。

一人称単数の場合には、話者、従って主語が、自分が一定の行為を行なった、あるいは行なわなかったことを主張し、相手に印象づけるような文脈に用いられることが多い。例えば、

**ТЪГДА ЖЕ КНАЗЬ ПОСЛА МНШЮ ВЪ ПЛЬСКОВЪ· РЕКА· «ПОНДИТЕ СЪ**

МНОЮ НА ПОУТЬ· А ЗЛА ДО ВАСЬ ЕСМЬ НЕ МЫСЛНЛЪ· НКТОРАГО  
ЖЕ· А ТЪХЪ МН ВЫДАНТЕ· КТО МА ОБАДНЛЪ КЪ ВАМЪ·»

(p. 66, 105R, 6736(1228))

そこで公はミシャを使者としてプスコフに送り、「私と共に出陣しよう、私はあなたがたにいかなる悪も企んだことはない。私についてあなたがたに中傷した者たちを私に引き渡しなさい」と言った。

あるいは、

И ПОСЛАША НОВГОРОДЦН КЪ ГЮРЬГЮ НА ТЪРЖЬКЪ· В· МОУ· «КНЖ·  
ПОУ К НАМЪ ДѢТА· А САМЪ ПОНДН СЪ ТЪРЖЬКОУ·» ГЮРГН РЕ  
ПОСЛОМЪ· «ВЫДАНТЕ МН МКНМА НВАНКОВНЦА· МКНФОРА ТОУДО-  
РОВНЦА ...· НЕ ВЫДАДНТЕ ЛН· А Я ПОНЛЪ ЮСМЬ КОНЕ ТЪХВѢРЬЮ·  
А ЮЩЕ ВОЛУХОВОМЪ НАПОЮ·» (p. 64, 100R-V, 6732(1224))

ノヴゴロドの人々がトルジョクのユリーのもとに二人の市民を使者として送り、「公よ、私たちのもとに子どもたちを返して下さい。そして(あなた)自身はトルジョクから出て行って下さい(と伝えた)。ユリーは使者に「私にイヴァンコの子ヤキム、トゥドルの子ミキフォル.....を引き渡しなさい。引き渡さなければ、私はトヴェリ(川)で馬に水を飲ませてきたが、ヴォルホフの水も飲ませることにしよう」と言った。

ここでは ПОНЛЪ ЮСМЬ はすでにトヴェリを征服したという事実を主張して、相手に印象づけ、威嚇の効果を高めているということが出来る。

このように一定の行為を行なった、あるいは行なわなかったことを話者が主張し、相手に印象づけようとするところから、一人称は「一定の行為を行なった、あるいは行なわなかったにも拘らず、これこれの事態が生じた」というように、逆接を含む文脈の protasis の中に用いられるようになる。例えば、

И СЛЫШАВШЕ ПЛЪСКОВНЦІ· ЯКО ИДЕТЬ К ННМЪ КНЗЬ· И ЗАТВО-  
РИШАСА ВЪ ГОРОДѢ· НЕ ПОУША К СОБѢ· КНЗЬ ЖЕ ПОСТОЮВЪ НА  
ДѢБРОВНѢ· ВЪСПАТНСА В НОВЪГОРО· ...И ПРИШЪДЪ СТВОРН  
ВЪУЕ ВЪ ВЛАДУУННІ ДВОРѢ И РЕ· ЯКО «НЕ МЫСЛНЛЪ ЮСМЬ ДО  
ПЛЪСКОВНУЮ ГРОУБА ННУЕГОЖЕ· НЪ ВЕЗЛЪ ЮСМЬ БЫЛЪ ВЪ КОРО-  
БЬЯХЪ· ДАРЫ ПАВОЛОКЫ И ОВОЩЬ· А ОНИ МА ОБЕЩЬСТВОВАЛИ·»

(p. 66, 104R, 6736(1228))

プスコフの人々は公が自分たちのもとに向かっていることを聞いて町に立てこもり、自分たちのもとに入れなかった。公はドゥプロヴナにしばらくとどまり、ノヴゴロドに引き返した。……(ヤロスラフ公は)帰って来ると、導師の邸で民会を開いて、「私はプスコフの人々にいかなる悪も企んだことはない。それどころか錦や果物の贈物を籠にいれて持って行っていったのだ。それなのに彼らは私を侮辱した」と言い……

次のような例は逆に順接をを含む文脈の apodosis に用いられていると考えられるから、前の例の変形であると考えられる。「これこれの理由があったから、私はかくかくの行為を行なったのだ」という行為の正当性の主張である。例えば、

НА ТОУ ЗИМОУ ПРІДЕ КНЗЬ МЪСТИСЛА МЪСТНВЛАВНЦЬ НА ТЪР-  
ЖЬКЪ Н НЗМА ДВОРАНѢ СТОСЛАВАН Н ПОСАДНИКА ОКОВАША, А  
ТОВАРЫ НХЪ КОГО РОУКА ДОНДЕТЬ А В НОВЪГОРОДЪ ПРІСЛА  
«КЛАНАЮСА СТѢН СОФНН Н ГРОБОУ ОЦА МОЮГО Н ВСѢМЪ НОВ-  
ГОРОДЦЕМЪ ПРНШЪЛЪ ЮСМЪ КЪ ВАМЪ СЛЫШАВЪ НАСНЛІЕ Ѡ  
КНАЗЬ Н ЖАЛЬ МН СВОЮ ОЦННЫ» (р. 51, 75V-76R, 6718(1210))

同じ(年の)冬、ムスチスラフのムスチスラフ公がトルジョクに来て、スヴァトスラフの廷臣を捕えた。彼らは市長官に枷をはめ、手当り次第に財産を(奪った)。彼(ムスチスラフ)はノヴゴロドに使者を送って、「私は聖ソフィア教会、私の父の棺、およびすべてのノヴゴロドの人々にあいさつを送ります。私たちは公たちによる迫害のことを聞いてあなたがたのところに来ました。私は自分の世襲領地を哀れに思っています」と(言った)。

ТО ЖЕ ЛѢ БЫ МАТЕЖЬ В НОВЪГОРОДѢ НАУАША ИЗГОННТИ КНЗА  
ЯРОСЛАВА ИЗ ГОРОДА І СЪЗВОННША ВЪУЕ НА ЯРОСЛАВАН ДВОРѢ  
... КНАЗЬ ЖЕ ПОІДЕ НЗ ГОРОДА ПО НЕВОЛН НОВГОРОДЦН ЖЕ ПО-  
СЛАША ПО ДМНТРНЮ АЛЕХАНДРОВНУА ДМНТРНІ ЖЕ ѠРѢСА ТАКО  
РЕКА «НЕ ХОУЮ ВЗАТИ СТОЛА ПЕРЕДЪ СТРЕМЪ СВОЕМЪ» І БЫША  
НОВГОРОДЦН ПЕУДАЛНН А ЯРОСЛАВЪ НАУА ПОЛКЫ КОПНТИ НА НОВЪ-  
ГОРОДЪ І БѢ ПОСАДЪ КЪ ЦЮ ТАТАРЬСКОУ РАТНВОРА ПОМОУН  
ПРОСА НА НОВЪГОРОДЪ Н СЕ ОУУЮВЪ КНЗЬ ВАСНЛНН ЯРОСЛАВН  
ПРНСА ПОСЛЫ В НОВЪГОРОДѢ РЕКА ТА «КЛАНАЮСА СТОІ СОФНН І  
МОУЖЕМЪ НОВОРОДЦЕМЪ СЛЫШАДЪ ЕСМЪ АЖЕ ЯРОСЛАВЪ НДЕТЬ  
НА НОВЪГОРОДЪ СО ВСЕЮ СНОЛОЮ СВОЮ І ДМНТРНІ С ПЕРЕ-  
ЯСЛАВЦН І ГАЛѢ СЪ СМОЛНАНЫ ЖАЛЬ МН СВОЕМ ОЦННЫ»

(p. 88, 148R-149R, 6778(1270))

この年ノヴゴロドで騒乱が起った。人々がヤロスラフ公を町から追い出そうとし、ヤロスラフの屋敷に民会を召集した……公は渋々と町から出て行った。ノヴゴロドの人々はアレクサンドルの子ドミトリーを迎えに使者を送った。ドミトリーは次のように言って断わった。「私は公座を自分の叔父より前に占めることは望まない」と。それでノヴゴロドの人々は落胆した。ヤロスラフはノヴゴロドに対して兵を集め始めた。彼はあらかじめタタールの皇帝ラティボルの許に使者を送り、ノヴゴロドに対するための援助を乞うていたのである。ヤロスラフの子ヴァシリー公はこれを知って使者をノヴゴロドに送り、次のように言った。「聖ソフィアとノヴゴロドの人々に挨拶を送ります。私はヤロスラフが自分の軍勢のすべてを挙げ、ドミトリーがペレヤスラヴリの人々を率い、またグレブがスモレンスクの人々を率いてノヴゴロドを攻めようとしていることを聞きました。私は自分の父祖相伝の地のことが心配なのです」と。

一人称複数も例は少ないが原則として以上述べたことの何れかに属すると考えてもよいであろう。

行為の確認に属すると考えられるものとしては、次の例がある。

ТО ЛѢТ НѢМЦН ПРНСЛАША С ПОКЛОНОМЪ «БЕЗЪ КНѢЗА УТО ЮСМЫ  
ЗАШАН ВОДЬ· ЛОУГОУ· ПЛЬСКОВЬ· ЛОТЫГОЛОУ МЕУЕМЬ· ТОГО СѦ  
 ВСЕГО ШТОУПАЕМЬ· А УТО ЕСМЫ НЗЪНМАЛИ МОУЖНИ ВАШНХЪ·  
 А ТѢМН СѦ РОЗМѢННМЬ· МЫ ВАШИ ПОУСТНМЬ· А ВЫ НАШН ПОУСТН-  
 ТЕ»· І ТАЛЬ ПЛЬСКОВЬСКОЮ ПОУСТНША Н ОУМНРНШАСѦ·

(p. 78, 129V-130R, 6750(1242))

この年ネムツィが挨拶をもって使者を送ってきた。「公のいない間に私たちが武力で奪ったヴォヂ、ルガ、プスコフ、ロトウイゴラのすべてを引き渡します。そして私たちが捕えたあなたがたの人々を交換しましょう。私たちはあなたがたの人々を釈放します。あなたがたは私たちが人々を放してください。」そこで人々はプスコフの人質を釈放し、和平を結んだ。

このようにしてみれば、次の例もここに属すると考えられる。

(ФРАЗН) САМН К СОБЕ ВСН· «ОЖЕ НАМЪ НЕТОУ НСАКОВНЦА· С  
 ННМЬ ЖЕ ЮСМЕ ПРНШАН· ДА ЛОУЧЕ НЫ ЮСТЬ ОУМРЕТН ОУ ЦРѦГРѦ·  
 НЕЖЕЛН СЪ СРАМОМЪ ШЪНТН·» (p. 48, 68R-V, 6712(1204))



皆は互いに「(私たち)共にやって来たイサキオスがもはや私たちのもとにいないのであれば、恥と共に立ち去るよりはツァリグラドで死ぬ方がましだ」と(言い合った)。

これは第四回十字軍がイサキオスを殺されて言う場面である。

三人称の場合は何れも話者の行為の存在の主張乃至確認をあらわすと思われる。

НДЕ АРХЕПЪПЪ НОВЪГОРОДСКЫН НИФОНТЬ ВЪ РОУ· ПОЗВАНЪ НЗА-  
СЛАВОМЪ· Н КЛНМОМЪ МНТРОПОЛНТОМЪ· СТАВНЛЪ БО ЮГО БАШЕ  
НЗАСЛА СЪ ЮППЫ РОУСКЫА ОБЛАСТИ· НЕ СЛАВЪ ЦРЮГРЪ· А НИ-  
ФОНТЬ ТАКО МЪАВЛАШЕ· «НЕ ДОСТОННЪ ЮСТЬ СТАЛЪ· ОЖЕ НЕ  
БЛГНЪ ЮСТЬ Ѡ ВЕЛНКАГО СБОРА· НИ СТАВЛЕНЪ»

(p. 28, 25V-26R, 6657(1149))

ノヴゴロド大主教ニフォントがイジャスラフと府主教クリムに呼ばれてルシに行った。イジャスラフがツァリグラドに使者を送らずに、ルシの領土の主教たちと共に、彼を(府主教に)任命したからである。だがニフォントは「(府主教は)大本山によって祝福を与えていないし、任命もされてもいないのだから、彼はふさわしくない者になってしまっている」と言っていた。

Н ТѢ ОБАДНСТА ВОЛОДНИМРНЦА БРАДЮ СВОЮ· «Н НЕ НМН· КНАЖЕ·  
ВЪРЪ БРАТЪН НАЮ· СОУ НА ТА СЪВЕТАЛН СЪ УЪРНИГОВЬСКИМН  
КНАЗН»· Н ТЕМЪ Ю ОБЛНЦН РАЗАНЬСТНН КИЗН· Н ВСЕВОЛОДЪ  
НЗМА Ю· Н МОУ НХЪ· Н СКОВАВЪ· ПОСЛА Ю ВЪ ВОЛОДНИМРНЬ· А  
САМЪ ПОНДЕ СЪ НОВГОРОДЦН· Н СЪ КЛЕВЕТНИКОМА НА РАЗАНЬ-  
СКОЮ ВОЛОСТЬ·

(p. 50, 73V, 6717(1209))

そこで(二人の)ヴラヂミルの子らは自分の兄弟たちを中傷して、「公よ私たち二人の兄弟を信じてはなりません。彼らはチェルニゴフの公たちと共にあなたに対して陰謀を企んでいますと(言った)。こう言ってリャザンの公たちは彼らを非難したのである。フセヴォロドは彼らと彼らの家臣を捕え、枷をはめ、彼らをヴラヂミリへ送り、彼自身はノヴゴロドの人々と(二人の)中傷者と共にリャザンの地に兵を進めた。

これは中傷であったが、これらの誣告者の言葉の中にあつては、行為の存在したことの確認と主張の機能を果たしている。

このような用法を背景にしてみれば、次の例もまたここに属せしめることができよう。

ФРАЗН ЖЕ· ѿВЕДАВЪШЕ КЪТА НСАКОВИЦА· ВОЮВАША ВОЛОСТЬ  
ОКОЛО ГОРОДА· ПРОСАУЕ ОУ МЮРЮЮФЛА· «ДАН НАМЪ НСАКОВИЦА· ѿ(о) ПОНДЕМЪ КЪ НЪМЕУЬСКОУМОУ ЦРЮ· ѿНЕЛЕЖЕ ЮСМЕ  
ПОСЛАНИ· А ТОБЕ ЦРВО ЮГО»· МЪРЮЮФЛЪ ЖЕ Н ВСИ БОМРЕ НЕ  
ДАША ЮГО ЖИВА· Н ОУМОРНВЪШЕ НСАКОВИЦА· Н РЕКОША ФРА-  
ГОМЪ· «ОУМЪРЛЪ ЮСТЬ· ПРИДЕТЕ Н ВИДНТЕ Н...»

(p. 47, 68R, 6712(1204))

フリヤギはイサキオスの子が捕えられたことを知って、町の周りの領地を略奪し、ムルツプロスに頼んで、「私たちにイサキオスの子を下さい。そうすれば私たちはドイツ皇帝のもとに戻りましょう。私たちは彼のもとから送られたからです。彼の帝位はあなたのものです」と(言った)。ムルツプロスとすべての貴族は彼を生きたまま引き渡さず、イサキオスの子を殺してから、フリヤギに「彼は死んでいます。来て彼を見なさい」と言った。

この場合には行為の存在したことの確認と主張によって第四回十字軍に対するムルツプロスの断乎とした態度が明確に示されている。

次の例は直接話法ではないが、年代記者の個人的な感慨を叙するもので、一人称の語りの形を取り、直接話法に準ずるものと考えられる。

ГОЮ БО БОЮ ПОПОУЩАЮЩЮ ЗА ГРЪУЫ НАША· ОВО ГЛАДЬ· ОВО  
РАТЬ· ИНЫ ВСАКЫМ КАЗНИ· НО О МЛРДНЕ ЕГО ВЕЛНКЕ· І ТЕРПНТЬ  
О НАСЬ· ОЖДАМ ПОКАЯНИИ· ЯКОЖЕ САМЪ РЕКЛЪ ЕСТЬ· «НЕ ХОЩЮ  
СМРТИ ГРЪШНИКОУ· НО ОБРАЩЕНИИ ЖИВОТОУ ЕГО·» І ОСТАВЛЯЕТЬ  
НАМЪ ОСТАНКИ НА ОЖИВЛЕННЕ НАШЕ· (p. 80, 132R-V, 6759(1251))

主なる神は私たちの罪の故にあるいは飢え、あるいは戦やその他のあらゆる罰を下される。しかしああ(なんという)神の大きな慈しみであろう。神は「私は罪人が死ぬことではなく、彼が生命に還えることを望む」と自ら言われているように、悔い改めを期待されて私たちのことを堪え忍ばれ、私たちが生き返るように残り(の生命)を私たちに委ねられる。

次の例も年代記者のコメントである。底本の編纂者ナソーノフは ЯКО の次に引用符を入れていないが、この年代記の他の箇所から考えて、ЯКО に導かれる副文章を引用符によって囲み、直接話法と考えても差し支えない。即ち、

НННН ЖЕ ГЛТЬ· ЮКО СЕ (sc. ТАТАРЫ) СОУТЬ· О ННХ ЖЕ МЕФОДНН  
 ПАТОМЬСКИЙН ЕПП· СЪВѢДѢТЕЛЬСТВОУЮТЬ· ЮКО «СН СОУТЬ НШЛН  
 НС ПОУСТЫНА ЮТРНЮВЬСКИЙН· СОУЩЕ МЕЖН ВЪСТОКОМЬ Н СЪВЕ-  
 РОМЬ.» (p. 61, 95V-96R, 6732(1224))

またこの者たちは、パタラの主教メトディオスが「東と北の間にあるエトリフの荒野から来た」と述べている者たちのことだと言う者もある。

次の例もこれに続く年代記者のコメントである。

ТАТАРН ЖЕ ВЪЗВРАТНШАСА Ѡ РѢКЫ ДНѢПРА· Н НЕ СЪВѢДАЕМЬ·  
 ѠКОУДОУ СОУТЬ ПРНШЛН· Н КДѢ СА ДѢША ОПАТЬ· БЪ ВѢСТЬ·  
 ѠКОЛЕ ПРНДЕ НА НА ЗА ГРѢХУ НАША· (p. 63, 99V, 6732(1224))

タタールはドネプル川から引き上げたが、私たちは彼らがどこから来て、再びどこへ姿を消したか知らない。

タタールはバツーに率いられてルシの地を襲い、大きな禍いをこの地にもたらした。これらのタタールがどこから来たのかというのが話者の惑いである。これに対してどこに去ったかは、さほどルシの人々にとって重要なことではない。これが完了形 **СОУТЬ ПРНШЛН** とアオリスト **СА ДѢША** の相違として表われたと考えられる。もしそうとすればこの例もまた行為が存在したことの確認(及び主張)であるということができよう。

最後の文は、彼らが来たことが重要なのではなくて、彼らの来たのが「我々の罪の故である」ことが話者の言いたいことなのである。アオリスト **ПРНДЕ** が使用されているのはこのためであると解される。

以上直接話法に用いられている完了形の使用について考察したが、既に見たようにこれには人称による若干のニュアンスの違いが認められる。それに対して、単数であるか複数であるかによる差異は、さほど大きいとは思われない。

このことは、この完了形の機能が話者に依存するものであることを示している。何故なら人称の相違は話者と主語との関係に基づいているからである。もしそうとすれば、完了形の機能は三人称の場合に最も純粋な形で現われるに相違ない。三人称の主語が話者及び聞き手から独立しているからである。

このように考えれば、完了形の機能は一定の行為が過去に存在したあるいは存在しなかったことを話者が確認し、聞き手にそのことを主張するということにある、と考えてもよいのではないかと思う。

一人称の場合には話者と主語が一致するから、自分が一定の行為を行なった、あるいは行なわなかったことを相手に主張し、印象づけようとするということになると思われる。

また二人称の場合には聞き手と主語が一致するから、相手が一定の行為を行なった、あるいは行なわなかったことを相手に認めさせようとすることになる。これが場合によっては相手の行為を弾劾するニュアンスを持つことにもなると考えられる。

以上述べたことが正しいとするならば、完了形が直接話法の中に現われることが多いのも、よく説明できるであろう。直接話法では話者が顕在的に存在しているからである。

このような結論を用いて再びイストリナが引用した例を考察するとどのようなようになるだろうか。これを再度引用すれば次の通りである。

И РЕКОША ПЛЪСКОВНИЦН ПРНСЛАВЪШЕ· ГРЪУННА· «ТОБЕ СМ· КНА-  
 ЖЕ КЛАДЯЕМЪ· И БРАН НОВГОРОДЪЦЕМЪ· НА ПОУТЬ НЕ НДЕМЪ·  
 А БРЪН СВОЕН НЕ ВЫДАЕМЪ· А С РИЖАНЫ ЮСМЕ МНРЪ ВЪЗАНН·  
 КЪ КОЛЫВАНЮ ЮЕСТЕ ХОДНВЪШЕ СЕРЕБРО ПОНМАЛН· А САМН ПОН-  
 ДОСТЕ В НОВЪГОРОДЪ· А ПРАВДЫ НЕ СТВОРИ· ГОРОДА НЕ ВЪЗАСТЕ·  
 А ОУ КЪСН ТАКО· А ОУ МЕДВЪЖЕ ГОЛОВЪ ТАКО· А ЗА ТО НАШЮ  
 БРЬЮ НЪЗБНША НА ОУЗЪРЪ· А НННН ПОВЪДЕНН· А ВЫ РОЗДРАВШЕ  
 ТА ПРОУЪ· НАН ЮЕСТЕ НА НА ОУДОУМАЛН· ТЪ МЫ ПРОТНВОУ ВАСЪ  
 СЪ СТОЮ БЦЕЮ И СЪ ПОКЛОНОМ...» (р. 66, 105R, 6736(1228))

そこでプスコフの人々はグレチンを使者として送って来て「公よ、私たちはあなたと兄弟であるノヴゴロドの人々にあいさつを送ります。私たちはは出陣はしないし、自分たちの兄弟も引き渡しません。私たちはリガの人々と和を結んでいるからです。あなたがたはコルィヴァニに来て銀を略奪しました。自分はノヴゴロドに出発し、約束を果たさず、町を占領しませんでした。ケンでもメドヴェジャ・ゴロヴァでもそうでした。そのかわりに私たちは兄弟(のある者)を湖で殺され、他の者を連れて行かれました。あなたがたは(私たちを)苦しめて見捨てました。もしあなたがたが私たちになにか企んでいるなら、私たちは聖母と共につつしんであなたがたに異議をとなえます……」と言った。

プスコフに行った時、プスコフには公が貴族を捕えようとしているという噂がひろまり、公を迎えようとはしなかった。リガを攻めるという名目で、公がペレヤ斯拉ヴリから軍を率いてノヴゴロドに入ったことを聞いたプスコフの人々は、プスコフが攻められるのではないかと恐れ、リガと和を結んでリガに人質を差しだした。ノヴゴロドの人々はこれを知って公はリガを攻めると言っているが実はプスコフを攻めようとしていると考え、動揺した。プスコフがノヴゴロドの同盟都市だからである。ヤロスラフはプスコフに使いを送り、共にリガを攻めることを提案し、同時にヤロスラフがプスコフ攻めると中傷した者を引き渡すように命じた。引用の文はこれに対するプスコフの人々の答えである。

プスコフの人々がこの二つの申し出を拒否したのは、彼らがリガと同盟を結んだこと、ヤロスラフがコルィヴァニに行って銀を奪ったことである。その後続くアオリストによる文は事実の叙述である。そこで一応の話は終わり、最後に威嚇的な言葉が附加される。これが全体の話の流れであると思われる。

従ってこれは全体が伝達のテキストであるということになろう。直接話法の中に、伝達のテキストと語りのテキストの混在を認めようとするイストリナの所説は、いささか牽強附会に過ぎるのではなからうか。

## 地の文における完了形

### 従属文中に用いられている場合

地の文における完了形が従属文中に用いられる場合、地の文に用いられている完了形は、独立して用いられているものと従属文の中に用いられているものとに大別される。従属文の中で用いられているものには、明らかに主文の述語より以前に行われた行為を表わすものがある。例えば、

И СЪДЕША НОВГОРОДЦН· БЕС КНАЗЪА ·Ф· МЦЬ· ... И ПОСЛАША ПО  
ГЮРГА· ПО КНЗЪА СОУЖДАЛЮ· И НЕ НДЕ НЪ ПОСЛА СЪНЬ СВОИ РОС-  
ТН СЛА· ОЖЕ ТОН ПРѢ БЫЛЪ· (p. 26, 22R, 6649(1141))

そこでノヴゴロドの人々は、9 か月間公なしであった……彼らはユリー公(D17)を迎えにスズダリに使者を送ったが、彼は行かず、自分の息子ロススラフ(D171)を送った。この者がかつてそこにいたことがあったからである。

И ТО ЛѢ НДЕ КНЗЬ МНХАНЛЪ КЪ ГЮРГЮ· ПОНМА СЪ СОБОЮ МОУЖИ  
НОВОГОРОДСКЫА· ПРАВНТЬ ТОВАРОВЪ УТО ПОНМАЛЪ НА ТЪР-  
ЖЬКОУ· И ПО СВОЮН ВОЛОСТН· (p. 64, 101R, 6733(1225))

同じ年ミハイル公(G41)は、ノヴゴロド市民をつれて、ユリー(K3)がトルジョクと自分の領地に課していた財物を取りに、彼の許に行った。

ПРНДЕ КНЗЬ МНХАНЛЪ НС УЪРНИГОВА ВЪ НОВЪГОРОДЪ ... И ВДА  
СВОБОДОУ СМЪРДОМЪ НА ·Е· ЛѢ ДАННН НЕ ПЛАТНТН· КТО СВЕЖДАЛЪ  
НА УЮЖОУ ЗЕМЛЮ· А СММЪ ПОВЕЛЕ· КЪТО СДЕ ЖНБЕТЬ· КАКО  
ОУСТАВННН ПЕРЕДННН КНЗН· ТАКО ПЛАТНТЕ ДАНЬ·

(p. 68, 108R, 6737(1229))

ミハイル公はチェルニゴフから来て……他の土地へ逃げていたスメルドに5年間貢税を払わなくてよい自由を与えたが、ここにすむものには以前の公が定めたように、貢税を払うことを命じた。

ТОИ ЗИМЫ ПРЕСТАВИ МНТРОПОЛИТЪ ПЕТРЪ ВСЕМ РОУСН· НА МОСКВѢ· І ПОЛОЖИША І ВЪ ЦРВН СЫИ БЦА· ЮЖЕ САМЪ НАУДАЛЪ ЗДАТИ КАМЕНОУ·  
(p. 98, 164V, 6834(1326))

同じ年の冬、全ルシの府主教ペトルがモスクワで亡くなったので、人々は彼を彼自身が石造で建て始めた聖母教会に葬った。

次の例もこれに属するものと解することができる。

ВЪ ТО ЛѢ· ПРИХОДИ СВѢНСКЕН КИЗЬ СЪ ЕППОМЪ ВЪ· ШНЕКЪ· НА ГОСТЬ· НЖЕ Н-ЗАМОРЬЯ ШЛИ ВЪ· Г· ЛОДЬЯХЪ· Н БИШАСА· НЕ ОУСПЕША НИУТОЖЕ· Н ШЛОУУНША НХЪ· Г· ЛОДЬЮ· НЗБИША НХЪ ПОЛОУТОРА· СТА·  
(p. 26, 22V-23R, 6650(1142))

同じ年スヴェイの公が主教と共に 60 隻の軍用船に乗り、3 隻の船で海の向こうからやってきた商人を襲った。彼らは戦ったが、何も得ることができずに彼らの船を 3 隻奪い、彼らを 150 人殺した。

шли は、現代ロシア語の感覚で言えば、不完了体動詞に属する移動の動詞であり、従って「外国から行きつつあったところの」というように、過程を表わすもののように思われよう。しかしこれが完了形であることにより、上述したことから、「外国を出発した」のように解すべきであると思われるのである。次の例もこれと全く同様である。

НА ТО ЖЕ ЛѢТО ИДОША ДАНИИЦИ НОВОГОРОДСКИИ ВЪ МАЛѢ· Н ОУЮЮВЪ ГЮРГИ ОЖЕ ВЪ МАЛЕ ШЛИ· Н ПОСА КИЗЯ БЕРЛАДСКАГО СЪ ВОИ· Н БИВШЕСА ...  
(p. 28, 26R-V, 6657(1149))

同じ年の夏、ノヴゴロドの貢税徴収者が小人数で通行していた。ユリー(D17)は彼らが小人数で出てきたのを知り、ベルラチスキー公を軍勢とと共に送った。彼らは戦い……

この場合も「小人数で通行しつつあった」というよりは、「小人数で出発した」と解すべきである。ユリーが確認したのは「小人数である」ことであって、「通行しつつある」という情報ではないのである。過程を表わす次の例と比較すれば、このことは明らかであろう。

ЕППЪ Н КОУПЦЕ Н СЛЫ НОВГОРОДСКИИ· НЕ ПОУЩАХОУ НЗ РОУСН· Н ОНИ НЕ ХОТАХОУ НИГО КИЗЯ· РАЗБѢ СТОПЪЛКА· Н ВЪДА ИМЪ СТОПЪЛКА· Н-СВОЮ РОУКОУ· ВЪРОТИВСА ГЮРГИ· ОЖЕ ПОУСТНАЛЪ СЪ СВОИ НОВОУГОРОДОУ· Н ОУСЛЫШАША НОВЪГОРОДѢ· ЮКО СТОПЪЛКЪ ИДЕТЬ КЪ НИМЪ СЪ ВСЕБМИ ЛЮДЬМИ НХЪ· Н ИША РОСТИ-СЛА· Н ВЪСАДИША ВЪ ЕППЛЪ ДВОРЪ· СЪДЕВЪША· Д· МАЦИ·

(p. 26, 22R-V. 6650(1142))

(人々は)ノヴゴロドの主教、および商人たちをルシから行かせなかった。また彼らはスヴァトポルク(D114)以外の他の公を望んでいなかった。そこで彼(フセヴォロド(C41))はみずから彼らに手ずからスヴァトポルクを与えた。ユリー(D17)が自分の息子をノヴゴロドに送って誓いを破ったからである。(人々は)ノヴゴロドでスヴァトポルクが彼らのすべての人々をつれて彼らの許に向かっていると聞いて、ロスチスラフ(D171)を捕え、主教の屋敷に閉じこめた。彼が座していたのは4か月であった。

次の例もこれに属すると考えられる。

НЗЕНША КОРЪЛА ГОРОДУАНЪ· КТО БЫЛЪ РОУСН В КОРЪЛЬСКОМЪ  
ГОРОДКЪ· Н ВЪВЕДОША К СОБЪ НЪМЕЦЬ· (p. 94, 158R, 6822(1314))

コレラの町に来ていたルシ人の市民をコレラが殺した。

この場合、БЫЛЪ はアオリストの НЗЕНША と同時の行為ではなく、アオリストで表わされる行為以前に既に居たことを示すと考えられる。

Н КАКО СЪСТОУПНШАСА· БЫ СТРАШНО ПОВОНЦЕ· КАКО НЕ ВНДЛН  
НН ОЦН· НН ДБДН· (p. 86, 144V, 6776(1268))

彼らが衝突すると父たちも、祖父たちも見ることがないほどのおそろしい戦いが起こった。

次の例はこのような用法に当たらないように思われる。あるいはこれは НЕ ВНДЛН という表現が固定したものであるかも知れない。

Н ПОНДЕ СЪ СВОИМН ПОЛКЫ КНЗН· І СЪ НОВГОРОДЦН· І БЫ ЗОЛЬ  
ПОУТЬ· АКЫЖЕ НЕ ВНДЛН НН ДНН· НН ПОУН·

(p. 81, 135V, 6764(1256))

そして公は自分軍勢およびノヴゴロドの人々と共に進んだ。旅程は困難を極め、昼も夜も弁せぬ程であった。

これ以外の用法では説明がつかないものは、次の一例のみである。

ОСЪЛЕ СТОСЛА· РЪЖЕВКОУ· ГОРОДЬЦЬ МЪСТНСЛАВЬ· СЪ ПЪЛКЫ  
ВЪ ·І· ТЫСАЦЬ· МЪСТНСЛАВЬ ЖЕ СЪ ВОЛОДНМНРОМЪ СЪ ПЪЛСКО-  
ВЪСКЫМЪ ПОНДЕ БЪРЗЪХЪ ВЪ ·Е· СЪТЬ· ТОЛНКО ВО ВСЕХЪ ВОН  
БЫШЕТЬ· Н ПРИГОНН ОН ПОБЕГАН ПРОУЬ·

(p. 55, 83V-84R, 6724(1216))

スヴヤトスラフ (K6) がムスチスラフ (J51) の砦ルジェヴァを一万人の軍隊を率いて包囲した。そこでムスチスラフはプスコフのヴラヂミル (J52) と共にただちに 500 人の兵をもって出発した。それが軍隊のすべてだったからである。彼が追ったので敵は逃げだした。

この場合直訳すれば、「彼らが逃げてしまうまで彼は追った」ということになり、「逃げてしまう」のは明らかにアオリストの「追う」行為の後である。これはあるいは行為の完了のモーメントを明示するために用いられたのかも知れない。

### 主文中に用いられる場合

主文中に用いられる場合にも、完了形はこれと密接に関連する文の動詞が表わす行為に先行する行為を表わす。例えば、

Н БЫ НА ЗИМОУ· ПОВЕЖЕ МАТЕН ДОУШНАЦЕВНИЦЬ· СВЪЗАВЪ МОН-  
СѢНЦА БИРНЦЬ КВЕТНИЦЬ· НОВГОРОДЦИ ЖЕ ОУГОННВЪШЕ Н ЮША·  
Н ВЕДОША Н НА ГОРОДНЦЕ· Н ВЪНДЕ ЛЖА ВЪ ГОРОДЪ ВЫДАЛЪ  
ТВЪРДСЛАВЪ КНЯЗЮ МАТѢИ· Н ВЪЗВОННША ОУ СТО ННКОЛЫ· ОНН-  
ПОЛОВІЦИ ЦЕРЕСЬ НОУЬ ... ТАЖЕ КОПАУЕ ЛЮ· НА ТВЪРДСЛАВА·

(p. 58, 90R, 6726(1218))

冬になった。ドゥシリツの子マトヴェイは伝令の役人のモイセイの子を縛って逃亡した。ノヴゴロドの人々は彼を追って捕え、ゴロヂシチェに連行した。トヴルチスラフが公にマトヴェイを引き渡したという虚報が町に伝わったので、聖ニコラオスの教会で向こう岸の住人は夜通し鐘を鳴らし……トヴェルチスラフを攻めようと人々を集めた。

ТЪГДА ЖЕ МЪСТНСЛА МЪСТНСЛАНИЦЬ· ПЕРЕЖЕ ПЕРЕБЕГЪ ДНѢПРЬ·  
ШРѢИ Ш БЕРЕГА ЛОДЬЕ· ДА НЕ НДОУТЬ ТАТАРИ ПО ННХЪ· А САМЪ  
ШДВА ОУБЕЖА.

(p. 63, 99R-V, 6732(1224))

この時ムスチスラフの子ムスチスラフ (J51) は、事前にドネプル川を渡り、タタルが彼らを追いかけてこないように岸から船を離して、身一つでやっと逃げた。

従って完了形はある行為に先行し、その行為の起こる背景の説明に用いられることも、しばしば見受けられる。例えば、



ТАТАРОВЕ ЖЕ ВЪЗША ГРАДЪ МЦА ДЕКЪ ВЪ КЪ· А ПРН СТОУПНИН  
ВЪ· ЗІ· ТЪ ЖЕ МЦА· (p. 75, 122V, 6746(1238))

タタールは町を十二月二十一日に占領したが、やって来たのは同じ月の十六日であった。

ТЪ ЖЕ ЛЪ ІДОША СЪ ПЛЪСКОВНУН· ВОЕВАТЬ НУХЪ· І ОНИ ПРО-  
ТНВОУ ІУХЪ ПОСТАВНША ПОЛКЪ· І ПОВЪДНША Ю ПЛЪСКОВНУН· СІ-  
ЛОЮ КРЪТА УТНАГО· САМИ БО НА СЕБЕ ПОУДАЛИ ОКАНЬНИН· ПРЕ-  
СТОУПНИЦ ПРАВДЫ· І ПРНСЛАША ВЪ ПЛЪСКОВЪ І В НОВЪГОРОДЪ·  
ХОТАЩЕ МНРА НА ВСЕН ВОЛН НОВГОРОДСКОН· Н НА ПЛЪСКОВЪ-  
СКОН· І ТА ОУМІРІША· (p. 80, 133R, 6761(1253))

同じ年人々はプスコフの人々と共に彼らを攻めるために行ったので、彼らは彼らを迎えて陣を敷いた。そして聖なる十字架の力によってプスコフの人々が彼らを打ち負かした。これらの取り決めに違背した呪われたもの達が自分自身に対して裁きを始めたからである。彼らがノヴゴロドに使いを送ってきたので、彼らは和を結んだ。

І ПОУАША БЪЗДНТИ ОКАНЬНИН ПО ВЛНЦАМЪ· ПНШЮУЕ ДОМЫ ХРЪТЪ-  
КНЬСКЫН· ЗАНЕ НАВЕЛЪ БЪ ЗА ГРЪХУ НАША· НЕ ПОУСТЫНА ЗВЪРН  
ДНВНКА· ІАСТИ СНАВУХЪ ПЛЪТН· І ПНТИ КРОВЬ БОМЪРЬСКОУ·  
(p. 83, 137V-138R, 6767(1259))

呪われたもの達(sc. タタール)は通りを回り始め、キリスト教徒の家々を記録した。なぜなら神は私たちの罪の故に荒野から強いもの達の肉を食べ、貴族の血を飲むために野獣を差し向けられたからである。

ХОДИ МНРОСЛАВЪ ПОСАДНИКЪ· НЗ НОВАГОРОДА МНРНТЬ КЫМАНЬ  
СЪ ЦЕРНИГОВЪЦН· Н ПРНДЕ· НЕ ОУСПЕВЪ ННЦТО ЖЕ· СНАВНО БО  
ВЪЗМАЛАСА ВСА ЗЕМЛА РОУСКАЯ· (p. 28, 16R, 6642(1134))

市長官ミロ斯拉フはノヴゴロドから行ってキエフの人々とチェルニゴフの人々とを和解させようとしたが、なにも果たせずに帰ってきた。ルシの国全体が激しく動乱していたからである。

このように背景の説明に用いられることが、イストリナをして完了形の意義を時間におけるその発展の描写を考慮しない状態及び行為を表わすと感じさせた可能性がある。完了形の用いられた箇所では話が一時停滞するのである。

СЕ ИМЕНА ВОЕВОДАМЪ НХЪ· А· МАРКОСЪ Ѡ РИМА· ВЪ ГРА БЪРНЕ·  
 НДЕЖЕ БЕ ЖНЛЪ· ПОГАНЫН ЗЛЫН ДЕДРИКЪ· А· В·—Н КОНДОФЪ  
 ѠФЛАНЪДРЪ· А· Г· ДОУЖЪ· СЛЪПЫН Ѡ МАРКОВА ОСТРОВА· ВЕНЕ—  
 ДНКЪ· СЕГО ДОУДА СЛЪПНАЪ МАНΟΥНАЪ ЦЕЪ· МНОЗИ БО ФИЛОСОФИ  
 МОЛХОУТЬСА УРВН· АЩЕ СЕГО ДОУЖА ѠПОУСТИШИ СЪДРАВА· ТЪ  
 МНОГО ЗЛА СТВОРНТЬ· ТВОЮМОУ ЦРТВОУ· ЦРЬ НЕ ХОТЯ ЮГО ОУ—  
 БНТИ· ПОВЕЛЪ ОУН ЁМОУ СЛЪПНТИ СТЬКЛОМЪ· Н БЫ ОУН ЕМОУ ЯКО  
 НЕВРЕЖЕНЪ· НЪ НЕ ВИДАШЕ НИУЕГО ЖЕ·

(p. 49, 71R-V, 6712(1204))

以下が彼らの指令官の名前である。1. ローマの侯爵、彼は異教徒でよこしまなテオドリクがかつて住んでいたベルンの町にいた。2. フランドル伯。3. 聖マルコの島のヴェネチア人、盲目の長。この長を皇帝マヌエル(一世)が盲目にしたのであった。多くの哲人が皇帝に懇願して、「もしこの長を無事に釈放すれば、この者はあなたの帝国に多くの悪事を行なうでしょう」と言ったからである。皇帝は彼を殺すことを望まず、ガラスで彼の両目を潰すように命じた。それでかれの両目は損なわれていないようであったが、何も見えなかった。

ここでは「盲目にした」ことが完了形で語られ、長、即ちエンリコ・ダンドロが盲目になった経緯が説明として挿入されている。その経緯そのものはそれ自身語りになっていて、通常の語りと同じく未完了過去形やアオリストが用いられている。従ってここでは完了形は二つの語りをつなぎ、後の語り全体が前の語りの説明になっていることを示す役割を果たしている。

以上述べた用法に属するかどうか、疑わしいものはきわめて少ない。例えば、

Н ПОСЛАША НОВГОРОДЪЦН ПОСЛЫ· ЗОВОУУЕ ЮГО В НОВГОРО·  
 АРХИМАНДРИТА ЛАВРЕНТИА· ФЕДОРА ТВЕРДН СЛАВАНУА· ЛЪКЪ  
 ВАРФРОМЪЮВА Н ШНЪ МОЛБЫ НЕ ПРНМАЛЪ· А НХЪ НЕ ПОСЛОУШАЛЪ·  
 А МНРОУ НЕ ДА· ПОЪХА ПРОУЪ· (p. 99, 167V, 6841(1333))

ノヴゴロドの人々は彼(sc. イヴァン(Q2))をノヴゴロドに呼ぶために使者を送った。掌院のラヴレンチー、トヴェルチスラフの子フェドル、ヴァルフオロメイの子ルカである。彼は願いを受け入れず、彼らの言うことも聞かないで和平を結ばず、立ち去った。

ДОБИША УЕЛОМЪ НОВОГОРОДЪЦН· БОТАРЕ Н УЕРНЫН ЛЮДИ АРХИ—

ѸПНСКОПЪ НОВЪГОРОДСКОМЪ ВЛЦѢ ВАСНАЮ· УТОБЫ «ѸСН ГНЕ·  
 ЕХАЛЪ НА РАДНАЛЪ КОСТРЫ ВО ОРѢХОВѢ» Н ОНЪ ЕХАВЪ· КОСТРЫ  
 НА РАДНАЛЪ· Н ПРНЕХА В НОВГОРОДЪ· (р. 100, 168V, 6860(1352))

これらの完了形は、何れも(波型)の下線で示したアオリストよりも前の行為であることは間違いないが、果たしてそれだけの事なのかどうかははっきりしない。むしろこれらの例では、完了のアスペクトが重要なのではないかという印象を受ける。これらが何れも第三の手跡による年代記の末尾にあることから、現代語にみられるような「完了体過去」の機能に移行しつつあることを示す例かもしれない。第二の会話の部分にある完了形は何れも УТОБЫ に伴われるものであって、いま対象としている形式ではない。

次の二例も解釈の余地を残す用例である。

І ВЕРЖЕСА ОГНЬ НЗ НѢМЕУЬСКОГО ДВОРА В НЕРЕВЬСКИЙ КОНЕЦЬ·  
 ЗАГОРѢСА НА ХОЛОПН ОУЛЦН· А ТАМО ТОГО СНАБѢ ОГНЬ· А  
 НЕРЕВЛАНЕ НА ОНОІ СТОРОНѢ· А МОСТЬ ВЕЛКЫН ОГНЬ ЗАДЛАЪ· Н  
 ТА СТОРНЕСА ПАГОУБА ВЕЛНКА ... НА ТОРГОВОМЪ ПОЛОУ ВІ ЦРКВНІ  
 СГОРѢ· НКОНЪ НЕ ВСѢХЪ ОУСПѢША ВЫНОСИТИ· НИ КНН·  
 (р. 90, 151R-V, 6807(1299))

火はネムツィの館からネレフスキー区に飛び、ホロピヤ通りで火の手が上がり、そこで火は最も激しくなった。ネレフスキー区の住人は向かい側にいたが、火は大橋を捉えた。こうして大きな破壊がなされた……商業地区では12の教会が全焼し、イコンも書物もすべて持ち出すことが出来なかった。

この例ではなぜ「火は大橋を捉えた」という箇所だけが完了形なのか、はっきりしない。ネムツィの館、ネレフスキー区はともにヴォルホフ川の左岸のソフィア地区にある。これに対して商業区は右岸にあり、両者を繋ぐのが大橋である。ネレフスキー区の住民が向かい側に居たのであるから、この記事の作者は右岸の商業区からこの火事を見ていたことになる。上例の記述ははじめ対岸のソフィア地区に始まった火事が大橋を伝って商業区に及び、「大きな破壊がなされた」ことを示している。このような構造からすれば「火が大橋を捉えた」のが、「大きな破壊」の前提を為すと解釈することも出来よう。これが正しいかどうかは明らかではない。

А НОВГОРОДЦЕ СЪЗВА НА ПОЛЕ ЗА ТЪРЖОКЪ· ВЪ МЛ· ПОУНОУЮ  
 СОУЮ· ВСЕН МОУ Н ГОСТЬБНИЦН· НЗМАВЪ КЪ ВСА· ПОСЛА НСКО-  
 ВАВЪ ПО СВОИМЪ ГОРОДОМЪ· А ТОВАРЫ НХЪ РАЗДАЮ Н КОНЕ· А  
 БАШЕ ВСѢХЪ НОВГОРОДЦЪ БОЛЕ· М· Н ПРНДЕ ВЕСТЬ ВЪ НОВЪГО-

РОДЪ· БАШЕ ЖЕ НОВГОРОДЬЦЕВЪ МЛЛО· ОНО ТАМО НЗМАНО ВАУБ-  
 ШІЄ МОУ· <sup>π</sup>А МЪНШЕЄ ОНИ РОЗНДОШАСА· А ННОЄ ПОМЪРЛО ГО-  
 ЛОДОМЪ· (p. 55, 82V-83R, 6723(1215))

彼 (sc. ヤロスラフ (K4)) は乾酪週の土曜日 (1216年2月20日)、トルジョク郊外の野原にノヴゴロドの人々、すべての市民と商人を呼び集めて彼らを抑え、枷をはめた上で自分の町々に送った。また彼らの財物と馬を分配した。ノヴゴロドの人々は全部で2000人以上であった。この報せがノヴゴロドにも届いたが、ノヴゴロドの人々は少数であった。貴族がそこで捕えられており、平民もあるものは四散し、他のものは飢えて死んでしまったからである。

この場合、「死んでしまっていた」のはあるものが「四散する」前であったとすれば、少なくとも論理的には矛盾しないが、これが正しいかどうかは明らかではない。

以上の僅かのはっきりしない例はあるものの、地の文に用いられる完了形の大部分はかなり明確な用法を持っているということが出来る。それはある行為に先立つ行為を表わし、しばしば後続の行為の背景を示すのに用いられる、ということが出来る。これは文中で後続の行為よりも後に現われるときに著しい。これらの用法を会話の中に用いられる場合と考え合わせると、完了形の基本的な機能は発話の時点より以前の行為を表現するところにある、ということが出来そうである。会話の文、即ち伝達のテキストにおいては、所与の行為が「先立つ」基準は明らかに発話の時点であり、またその行為を述べるのが話者であるから、完了形による表現はその行為が少なくとも話者にとって確実なものであるとして意識されているときに用いられると考えられる。従って主語と話者が一致する一人称の場合にはこれは話者が自分が一定の行為を行なった、あるいは行なわなかったことを主張し、相手にそのことを印象づけるときに用いられることになる。また主語が対話者である二人称の場合には、あるいは相手の行なった行為を明確に示すことによって、相手に念を押すことにもなり、あるいは相手の非を鳴らすことにもなる。また主語が話者でもなく、対話者でもない三人称の場合には話者が一定の行為の存在したことを主張することになると考えられる。これに対して地の文即ち語りのテキストの場合は話者が明示されないから、「先立つ」基準は発話の時点ではなく、テキスト中に示される一定の行為である。従属文の場合にはこれは多くの場合主文中の動詞によって示される。逆に完了形が主文にある場合には、これは先行あるいは後続する文脈中のある動詞によって示される。この場合両者の間には形式的な関連は存在しないから、内容的には完了形で示されるものがアオリストなどによって叙述された行為の前提を示すことが多くなる。以上が平凡ながら完了形の用法についての結論となる。